ぱちぱちぼいす

距離感が微妙な小悪魔系の義理姉と行く温泉旅行

収録台本・購入者様特典 ver.

※一部製品音声と異なる場合がございます。予めご了承くださいませ。

亜美　「ぱちぱちぼいす」

亜美　「距離感が微妙な小悪魔系の義理姉と行く温泉旅行」

亜美　「主人公である弟と、その弟をからかう小悪魔的な姉」

亜美　「２人は親同士の再婚のため血は繋がっていない義理の姉弟」

亜美　「少し前、弟は姉に告白し、晴れて恋人同士に」

亜美　「初めていく２人だけでの温泉旅行。それはもちろん、エッチするために……」

亜美　「どうもありがとうございましたー」

亜美　「わぁ～！　ネットで見たとおり、いい感じの旅館だね～！　雪も旅情があっていい感じ」

//★タイトルコール～イントロダクション

//★トラック１　期待膨らむ弟との温泉旅行

●旅館の前（昼・曇り）

亜美　「でも……（大きく背中を伸ばしながら）ん～～～！！　ここまで着くの、長かったぁー。あんたも疲れたでしょ？　そでもない？」

亜美　「そっか。うんうん。男の子だねぇ」

亜美　「えー。男の子って言われるの、今でもいやなの？　でも、男の子じゃん？　あたしの弟なんだしぃ……」

亜美　「あたしより背が高くなったばかりだしぃ……。そりゃあ、血は繋がってないけどぉ。まだまだ男の子――でしょ？」

亜美　「よしよし。ナデナデ」

亜美　「んー？　あたしにナデナデされてムッとするなんて、あんただけだぞー？」

亜美　「……ま、他のヤツにこんなことしないけどね」

亜美　「ううん。なーんでもない。じゃあ、中に入ろっか？」

亜美「こんにちはー。予約した山田亜美ですけどー」

女将さん「はい、お伺いしております。ようこそおいで下さいました。」

亜美「（……あー、本当に来ちゃった。弟くんと二人っきりの温泉旅行。しかも、こんな素敵な旅館……）」

亜美「（……押しきられてＯＫしちゃったけど……実はあたしも楽しみにしてたんだよね……）」

＊＊＊

亜美「（心の声）あたしと弟が出会ったのは、恋なんて知らないくらい幼い頃。あたしのママと弟のお父さんが再婚した時だった」

亜美「（心の声）それから一緒に暮らしはじめて、最初に意識したのはあたしだった。でも、そんなこと知られたくなくて、弟にイタズラしてばかり」

亜美「（心の声）それは、ちょっとずつエッチなイタズラになっていって……。そしたら、とうとう弟が告白してきた。ううん、告白してくれた」

亜美「（心の声）突然のことだったから本気で照れちゃって……。でも、ちゃんとオッケーした。そしたら冬休みに旅行に行かないかって……」

亜美「（心の声）その時のあたしは耳まで真っ赤になってたと思う。ゆっくりうなずいて、そのままキスして……」

亜美「（心の声）それが先週のこと。キスは何度かしたけれど、そこから先はまだ。やっぱり今晩しちゃうのかな？　しちゃうよね……」

●客室（昼）

//★トラック2　さっそくムラムラ……昼からの露天風呂

亜美「ん～、タタミのいい香りがするね」

女将さん「この部屋は、露天風呂付き客室となっており、いつでもお入りいただけます」

亜美「わぁ～。じゃあ、ずっとお湯が出っぱなしなんですね」

女将さん「左様でございます。御夕飯は１８時と伺っております」

亜美「それでお願いしまーっす」

女将さん「かしこまりました。それではごゆっくりどうぞ」

亜美「ありがとうございましたー」

亜美「さてっと……」

亜美「んふっふ～。２人っきりになっちゃったね。どうしよっかぁ？」

亜美「え？　もう露天風呂に入りたいの？　あたしと一緒に？　ちょっと早くなーい？　まだ昼だよ？」

亜美「もう。この話しただけで、おっきくするんだから。だーめっ。まだガマンして」

亜美「ん？　どうしたの？　もじもじしちゃって……ちょっと前屈みに……って、もしかしてエッチなこと想像しちゃった？」

亜美「それで、そこがおっきくなっちゃったの？　だから、早いよー、もー……。嬉しいけどさ」

亜美「でも、着いたばかりだよ？　一休みしてからでもいーんじゃない？　いや？」

亜美「あー……。また拗ねちゃった。んもう。そんなにあたしの裸……見たいの？」

亜美「わっ！　すっごい勢いで何回も頷いてる！　わ、わかったから、もー……しょーがないなぁ……。それじゃあ、一緒に入ろっか？」

●部屋についている露天風呂（昼）

亜美「ん～！　まだ早くなーい？　……なーんていっちゃったけど、昼間から露天風呂に入るの気持ちいーね～！　それに、すっごくゼータク！」

亜美　「……って、どうして背中を向けて入ってるのかな、弟くんは？　お姉ちゃんの裸、見たいんじゃなかったのー？　んー？」

亜美　「ほっぺた、つんつん。ん？　ほっぺた、つつくなって？　じゃあ、こっちを向きなさいよ」

亜美　「もしかして、恥ずかしくなっちゃったの？　だから、先に湯船に入って、あたしを待ってたの？」

亜美　「んふふ～。かーわいー。まー、一緒にお風呂に入るのなんて子供の頃以来だものね。１０年振りくらい？」

亜美　「あれから背が伸びて、あたしはおっぱいもお尻も大きくなって……」

亜美　「あんたはすっかり男らしい体つきになって……かわいかったあそこも大人になっちゃってるよね……？」

亜美　「ん～？　どこかって？　もう。わかってて尋ねてるでしょ……。おちーんちん、だよ」

亜美　「見せてくれないのー？　お姉ちゃんの裸、見たくないのー？」

亜美　「……ふむ。あたしの身体は見たい。でも、おちんちんは見られたくない……と」

亜美　「そんなわがまま通用しません！　えい！」

亜美　「（耳元でささやいて）……お姉ちゃんのおっぱい、あんたの背中にぎゅ……って当てちゃった。どーお？　まだこっち向いてくれないの？」

亜美　「（耳元でささやいて）……んー、逆？　こんなことしてたら余計にこっち向けない？」

亜美　「（耳元でささやいて）……それはもしかしてぇ……おちんちんがおっきくなってるから？」

亜美　「（耳元でささやいて）……沈黙は肯定ってことでいーのかなー？」

亜美　「（耳元でささやいて）……ふぅん……じゃーあー……ちょっと触ってみようかなー……」

亜美　「わっ！　かったぁ～い！　鉄の棒みたいになってるじゃない……」

亜美　「まだお姉ちゃんの裸を見てないのに……。おちんちん、こんなにおっきくしちゃって……。スケベなんだねぇ」

亜美　「えっ？　お姉ちゃんが背中におっぱい押しつけながら、おちんちんを触るからだって？」

亜美　「（耳元でささやいて）……んふふ……あたしのおっぱいのせいなんだ……お姉ちゃんは嬉しいぞ」

亜美　「（耳元でささやいて）……でも、そろそろこっちを向いてくれないと……このままシコシコしてイカせちゃうぞぉ？」

亜美　「んー、やっとこっちを向く気になった？　じゃあ、少し離れるよ」

亜美　「……やっとあたしと目が合ったね」

亜美　「……んー、でもこれ、確かに照れちゃうね……あはははっ……」

亜美　「綺麗？　あたしが？　……うん、ありがと。あんたも引き締まった身体しててカッコイイよ」

亜美　「……あっ、んっ……あたしのおっぱい……触るの？　……うん、いいよ。でも、その前に……」

亜美　「（耳元でささやくように）……キス……して」

亜美「んちゅっ……れろっ、ちゅ、ちゅ……んっ……れろっ、んちゅっ……んんんっ……んくっ……ちゅっ……んあむっ……ふっ、ちゅくっ、れろ、ちゅる……」

亜美「んもうっ……いきなり強引なキスするんだからぁ……最初はもっと優しく……」

亜美「えっ、興奮しまくってるから優しくなんて無理？　しょーがないなぁ、もう……じゃあ、好きにしていいよ？」

亜美「んっ！？　んちゅっ……れろっ、ちゅっ、ふんむ……んえ、ふっ……はぷ、ん、ちゅっ……んちゅっ……れろっ、んぷっ……ちゅっちゅっ……んちゅ……」

亜美「……あ、このキス、凄い……舌が絡み合って……身体中がびくびくって震えちゃう……れろっ、ちゅぷっ……ちゅっ、んんっ……ちゅっ、れろっ……ちゅっ」

亜美
「れろっ、んちゅ、れろっ、ちゅぷっ……れろっ、んちゅっ、れろっ……んん……ちろっ、れろっ……ちゅく、ん、ちゅぷっ……れろ、ぺろぉ……えろ……」

亜美
「やっ……んっ、上手ぅ……いつの間に……こんなにキス、上手になったのぉ……？　まだ数えるくらいしかしてないのにぃ……んちゅっ、れろっ、ちゅ……」

亜美
「はぁ……んちゅっ……頭の中が蕩けちゃいそおおっ……んちゅっ、あなたも同じなのぉ？　んっ、嬉しい……んちゅっ、れろっんちゅっ……ちゅぷっ……」

亜美
「ぷあっ……！　はぁ……んっ……すっごいキス、しちゃったね……んふふっ……今のキスだけでイッちゃいそうだったよ……はぁ……」

亜美
「（耳元でささやくように）……あんたもイッちゃいそうだった？んー、ほんとかなー……？」

亜美　「わっ、あんたのおちんちん、がっちがちになってる……！　さっきよりおっきくなってない？　キスのせい？」

亜美　「……そっか。エッチは夜に……って思ってたけど、これじゃあ苦しいよね？　じゃーあー……」

亜美　「（耳元でささやくように）……お口でしてあげよっか？　んー？　して欲しい？」

亜美　「（耳元でささやくように）……わかった。してあげる」

亜美　「立ち上がって、そこに腰かけて……」

亜美　「うっわっ……おちんちんから湯気が立ってる。ぴくぴくって震えて本当に苦しそう」

亜美　「……すぐに楽にしてあげるからね……はぁむっ……」

亜美
「……ちゅぷっ、くちゅ……んんっ……れろれろ……くちゅ……んふっ……ちゅむっ……くちゅ……れろれろ……ちゅぷっくちゅ……」

亜美
「どうかな？　あたし、ちゃんとできてる……？　気持ちいい？　えっ？　めちゃくちゃ気持ちいい？　ふふふっ。よかった。じゃあ続けるね……」

亜美
「……はぁむっ……ちゅぷっ……くちゅ……れろれろ……くちゅ……んふっ……れろれろ……ちゅぷっくちゅ、くちゅ……れろれろ……んはっ……れろれろ……」

亜美
「んんっ！？　なんか出てきた？　ふーん、これ、ガマン汁って言うんだ。変な味。でも、キライじゃないかも……はむっ……ちゅっ……れろっ、ちゅ……」

亜美

「……れろれろ……んんっ……れろれろ……ちゅむっ……くちゅ……んんっ……ちゅぷっくちゅ……んっ……ちゅぷっ……くちゅ……れろれろ……ちゅぷっくちゅ……」

亜美

「……んん……くちゅちゅむっ……んんつ……くちゅ……んふっ……れろれろ……くちゅちゅぷっ……んふっ……ちゅぷっ……れろれろ……ちゅぷっ、んっ……」

亜美

「んふふっ……あたしの口の中でぴくぴくって動いてるね……そぉーんなに気持ちいいんだ？　あたしのフェラチオ。嬉しいな……ちゅっ、れろっ……」

亜美

「ん？　裏筋？　おちんちんの裏側、裏筋って言うの？　ふぅーん……そこも気持ちいいんだ？　じゃあ、裏筋ばっかり責めてあげる……舌でぺろぺろって……」

亜美

「れろっ、れろっ、んじゅるっ……れろれろ……ちゅぷっ……れろれろ……ちゅむっ……くちゅ……ちゅぷっくちゅ……じゅりゅっ……ちゅっ……れろっ……」

亜美

「なんだか硬いキャンディー舐めてるみたい……ふふっ……れろっ……ちゅぷっ……くちゅ……ちゅぷっ……れろれろ……んふぅん……ちゅむっ……」

亜美

「ふふっ。感じてる感じてる。かーわいー……なんだかあたしも興奮してきちゃった……また咥えちゃうね……はぁむっ……」

亜美

「……くちゅちゅぷっ、れろれろ、はあぁぁん……！　んんっ、くちゅちゅぷっ……ちゅぷっくちゅ……んん……！　んふっ、ちゅむっ、くちゅ、れろれろ……！」

亜美「刺激が強い？　そんなの当然。さっきより激しくしてるんだもの。んー？　それじゃあ、すぐイッちゃうって？」

亜美「（耳元でささやくように）いつでも出していいよ。うん。もちろん、あたしの口の中に……」

亜美「……はむ。ちゅぷっ、ちゅぷっ、くちゅ！　れろれろ、ちゅぷっくちゅ、んんふ！　ちゅむっ、くちゅちゅぷっ、んふ！　れろれろ、ちゅぷっ、れろれろ！」

亜美「ちゅぷっ、んふぅん、ちゅむっ、くちゅ！　れろれろ、ちゅぷっくちゅ、くちゅちゅぷっ！　くちゅっ、ちゅぷっんっ、くちゅ！れろれろっ、れろれろっ、ちゅむっ！」

亜美　「んふぅんっ、ちゅぷっ、んふっ、くちゅ、ちゅぱっ、んふっ、んんっ、はぁむ！　れろっ、ちゅぱっ、んふぅんっ！　んんっ、んぷっ、ちゅちゅっ、ちゅぶ、ぶぶぶっ！」

亜美　「（ナレーション）わっ、またあたしの口の中で、おちんちんがぷくって膨らんだ！　ほんとに、もうイキそうなんだ……！」

亜美　「もうれそう！？　んっ、いふれも出ひて！　れろ、ちゅぷっ、くちゅ、じゅぶ、じゅぶぶっ、れろ、くちゅ、ちゅぱっ、ちゅぷ、んふっん、ぶぶぶっ……！」

亜美　「んぶっ！？　んぐっ！　んんっ！んぶぶぶぶっ……！」

亜美　「（ナレーション）ああ、凄い……！　あたしの口の中に、弟の精液、いっぱい出てるっ……！　すっごく熱い……！　口の中、火傷しちゃいそう……！」

亜美	「ちゅぷっ、ちゅぱっ、ちゅうううううううううううううぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」
亜美	「（ナレーション）おちんちんを強く吸ったら、弟がびくびくて痙攣した！　そんなに敏感なんだ、ここ……」
亜美	「……んっ。んー……ごくっ！　……はぁ……飲んじゃった。ん？　気持ち悪くなんてなかったよ。変な味だなーって思うけど」
亜美	「でさ、ちょっとは落ち着いた？　……って、まだ硬いままじゃん！？　どうして？」
亜美	「一回出したくらいじゃ興奮が治まらない？」
亜美	「きゃっ！　あ、待って。ここで最後までするのはだーめっ。のぼせちゃうかもしれないし……」

亜美　「（耳元でささやくように）せっかくの初エッチなんだから、夜にちゃんとお布団で、時間なんて気にせず、めいっぱいしよ？」

亜美　「（耳元でささやくように）わかってくれた？　うんうん。ありがとね。いい子いい子……なでなで……ふふっ……」

亜美　「（耳元でささやくように）……じゃあ、今度はさ、あたしのこと、後ろからぎゅってしてくれる？」

亜美　「……うん。これ、あんたに包まれてる感じがして……好き」

亜美　「芯まで温まる露天風呂で、こんな風にイチャイチャできるなんて……はぁ……幸せ……」

亜美　「ずっと入っていたくなるね。のぼせないように注意しなきゃ。ふふっ」

●客室（夜）

//★トラック3　お酒の力でからかいながらも……

亜美　「（酔っぱらったイメージで）いや〜、本当……しし鍋、美味ひぃ〜！　あたし、初めて食べたけど、こんなに美味しいなんて知らなかったー！」

亜美　「（酔っぱらったイメージで）地ビールも美味ひいし、日本酒も最っ高〜……うーん……鍋にめちゃくちゃ合うね〜。あはははー」

＊＊＊

亜美　「（ろれつが回っていない感じで）……って、どしたの？……あーん？　飲み過ぎぃー？　こぉーんなの、ぜーんぜんよゆーっす！　ちょーよゆーっす！」

亜美　「（ろれつが回っていない感じで）喋り方がおかしい？　ろれつが回ってない？　ほんなことないれしょーがぁー」

亜美　「（ろれつが回っていない感じで）……まったく。あたし唯一の楽しみを邪魔するなんて、地獄に堕ちるぞーう？」

亜美　「（ろれつが回っていない感じで）あんたは、まだお酒飲めないんだよね？　あーあ。こぉーんなに美味しいモノを飲めないなんて、もったいないなー」

亜美　「（ろれつが回っていない感じで）んー？　あんまり身体を寄せてくるな？　なぁーによぉ。露天風呂じゃあ、ずっとくっついてたくせに」

亜美　「（ろれつが回っていない感じで、耳元でささやくように）あー、もうおっきくなってる。勃起……しちゃってるね」

亜美　「（ろれつが回っていない感じで）凄いねー。浴衣がテントみたいになってる。ふふふ。おもしろーい」

亜美　「（ろれつが回っていない感じで）んー？　もうしたくなっちゃった？　だーめ。まだ晩ご飯の途中じゃない」

亜美　「（ろれつが回っていない感じで、耳元でささやくように）食べ終わってから……たっぷり、しよ？　ね？」

亜美　「（ろれつが回っていない感じで）んっ。ぷはぁ～。熱燗、おいち。あ、ついでくれるの？」

亜美　「（ろれつが回っていない感じで）もうちょっと……もうちょい……あ、そのくらいで。じゃ、いただきます。んくんくんくっ……ぷはぁ～」

亜美　「（ろれつが回っていない感じで）んふふふ。大好きな弟くんについでもらう熱燗……さいこー……」

＊＊＊＊

亜美　「あー、いっぱい飲んで、いっぱい食べたぁ～。お布団も気持ちいー……。このままごろごろしてたら寝ちゃいそう」

亜美　「ふふふっ。うそうそ。そんな悲しい顔しないで。あたしも最後までしたいって思ってるから……」

亜美　「じゃあ、まずはぎゅってして……」

亜美　「（耳元でささやくように）……あ、んっ……そう……もっと強くぎゅってして……そのままキスして……」

亜美　「……んっ、ちゅ……ちゅぷっ……ん、れろっ、ちゅっ……ちゅぷっ、ちゅっ……ちゅっ、んんっ……れろっ、ちゅっ……」

亜美　「……あっ、おっぱいも触るの？　うん、いいよ……あっ……んっ……はっ……もっと強く揉んでいいよ？」

亜美
「はっ、あっ……そう、強く、もっと強くして……んっ……！　はぁんっ、んんっ……！　はっ、んっ……！　はっ、あっ、んっ……！　はっ、あああぁ……！」

亜美
「あんっ。おっぱいの谷間に顔を埋めるなんて……甘えん坊さんなんだからぁ、もう。んっ……はぁ……あぁ……んっ……！」

亜美
「おっぱいに挟まれるの、そんなに気持ちいいの？　んんっ……すりすりしちゃって、かわいいんだからぁ……はっ、あっ……んっ、くっ……あっ……！」

亜美
「次は――……うん。いいよ……乳首……吸ってみて……」

亜美
「あっ！　いきなり、そんなっ、強く吸っちゃ、だめっ……！　あああっ……！　刺激、強すぎるからぁっ、ん、あああぁ……！」

亜美
「もう。がっついちゃって……最初は優しくしなきゃだーめっ……んっ……そう、舌でゆっくり転がして……あっ、んんっ……！」

亜美
「んっ、そうやって舌で弾くのもいいよ……あぁっ、んっ……！　ときどきだったら強く吸ってもいいから……！」

亜美
「んんっ、はあっ……！　ああっ、んんっ……！　やあぁぁっ、あああっ……！　ああぁっ……！」

亜美
「そう……ちょっと噛むのも気持ちいい……やだ、上手ぅ……はっ……んっ……はぁ……！　はぁんっ、んふぅんっ……はあぁっ、あああぁ……！」

亜美
「でも、ずっとおっぱいばっかりでいいの……？」

亜美
「……うん。そうだよね。そこも触りたいよね。あたしのおまんこ……。パンツ、脱がせて……」

亜美　「……ああ、あんたにおまんこ……見られてる……さすがに恥ずかしいね……ふふっ……んんっ……」

亜美　「ひゃっ！　そんなに股を広げないで……！　ホントに丸見えになる……んんっ……！」

亜美　「あっ！　いきなりおまんこに顔を埋めてぺろぺろするなんて……！　がっつきすぎぃっ……！　ああぁ……！」

亜美　「おしっこするところも、おまんこの穴も、クリトリスも全部まとめてベロベロ舐めるんだからぁ……！」

亜美　「そんなにされたら、お漏らししてるみたいに濡れちゃうううっ……！　もうちょっと優しくして欲しいのにいいっ、ああぁ……！」

亜美　「お姉ちゃんがエロすぎて無理！？　そんなこと言われてももぉ、あっ、んっ、はっ……！　んんっ、はっ、ああああっ……！」

亜美　「もうホント、舐めすぎだよおおっ……！　じゃあ、吸う！？」

亜美　「ひゃぁんっ！　クリトリス、そんな吸っちゃだめええっ！　口の中でぺろぺろしちゃだめぇぇっ……！」

亜美　「いつもはあたしの方が立場が上なのに、今は逆転してるからって調子に乗ってるでしょおおっ、あぁぁ……！」

亜美　「も、もうだめっ……！　あたし、イクっ、お姉ちゃん、もうイッちゃうよっ……！！」

亜美　「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ！！！！」

//★トラック4　はちきれそうなソレ……いれてもいいよ？

亜美　「はぁー！　はぁー！　はぁー！　弟くんにイカされちゃった……はぁ……んっ……あぁ……」

里美	「ん……キスするの……？　いいよ…ちゅ、れろっ……ちゅ……ちゅぷっ……ちゅっ……ちゅぷっ……ちゅっ、ちゅっ……れろっ、ちゅっ……ちゅくっ……れろっ、ちゅっ……」
里美	「（耳元でささやくように）……あんたのおちんちん、はちきれそうになってるね。もう入れてもいいよ？」
里美	「……よいしょっと、もっちょい下……そ、その辺、そのままぐって前に押し込んで……」
里美	「あっ！　んんんっ……！　ん　！……て……！　もっと奥までって奥まで入れて……んんんっ……！」
里美	「……？……だ……？　全部入っ……おちんちん、全部入っ……ん……ってみて動いてよっ！　奥まで届いてるよ。じゃあ、好きな番！のしたあとちゃん。ん……」

亜美「あっ……！　そう……！　そんな感じっ……！　あくっ、うっ、あぁっ……！」

亜美「いいよ、ちゃんとあたし、気持ちいいっ……！　おちんちん、奥に当たって、おまんこギュッて締めちゃうくらい気持ちいいから……！」

亜美「だから、もっと、もっと突いて……！　あっ！！　あっ、はっ、んんっ、はぁんっ、んんっ、はっ！　あぁぁっ！」

亜美「んふふっ……！　必死で突いてる……！　かわいいっ……！　あっ、んっ、かわいいよっ、弟くんっ……！　あんっ！」

亜美「あんたも感じてるね……！　表情でわかるよ……！　ふふっ、ほんとかわいいんだから！　あんっ、はっ、ああっ、んんっ、はぁんっ、んんっ！」

亜美
「んんっ……！　そんなに気持ちいい？　あたしのおまんこ……ふふっ、そうなんだ、嬉しい……！　んっ、はあぁ……！」

亜美
「やんっ！　あんたのおちんちん、おっきくなった！？　んっ、あっ、もしかして、もうイキそうなのっ！？」

亜美
「ふふっ、いいよ、イッて……！　中に出して、大丈夫だから……！　あんたの精液、いっぱい出して……！」

亜美
「あぁんっ！　あああぁっ！　あんっ、やぁんっ、ああんっ、あっ、はっ！」

亜美
「あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……！！！！」

亜美
「ああ……精液、出てる……すっごいわかる……！　んんっ……！　やんっ！　まだ出てるぅっ、んんんっ……！　あああぁぁ……！」

亜美　「すっごく熱いね……あんたの精液……あたしのおまんこ、火傷しちゃいそう……はぁ……」

亜美　「……気持ちよかった？　そう。あたしもすっごく気持ちよかったよ。ふふっ」

亜美　「もしかして、オナニーガマンして貯めてた？　ふふっ。やっぱり。あんたならやりそうだなぁって」

亜美　「でも、嬉しいよ。今日のためにガマンしてくれたんだから」

亜美　「（耳元でささやくように）……ありがとね。お礼に、おまんこ、ぎゅってしてあげる。んっ」

亜美　「ひゃんっ！　またぴゅって精液が出たね……ふふふっ……敏感なんだ。かーわいー……」

亜美　「じゃあ、汗もかいちゃったし、また一緒に露天風呂に入ろうっか？」

●部屋についている露天風呂（夜）

亜美　「はー……あんなに気持ちいいエッチして、そのあと夜の露天風呂だなんて……幸せ過ぎる……」

亜美　「あんたもそう思わない？　思うでしょ？　ふふっ。いいよね。来てよかったね」

亜美　「んー？　また、後ろからぎゅってしてくれるの？　うん。してして」

亜美　「……ん、もっと強くぎゅっって……うん、そう……そんな感じ……はぁ……幸せ……」

亜美　「ん？　なーんか硬いモノがあたしのお尻に当たってるぞー？」

亜美　「さっきあんなに出したのに、もう元気になっちゃったの？」

亜美　「あたしが魅力的過ぎるからって？　ふふっ。あんたもそういうお世辞をいうようになったんだねぇ」

亜美　「お世辞じゃないっ？　そっか。ありがと」

亜美　「あっ、こらぁ。調子に乗って、おちんちん擦りつけないの」

亜美　「……やっ、んっ……おちんちんの傘のところが……おまんこの割れ目にハマって……あっ……クリトリスに当たってる……」

亜美　「そんなことしたら……また入れたくなっちゃうじゃない……あんたも入れたいの？」

亜美　「んー……じゃあ、ここでしちゃおっかな。だから……」

亜美　「（耳元でささやくように）……あたしのおまんこに、あんたのおちんちん……入れちゃおっか？」

亜美　「（耳元でささやくように）……こぉーんなにガチガチになって苦しそうだもんね」

亜美　「（耳元でささやくように）……うん。いいよ。夜の露天風呂で、生エッチ。もちろん中出しだよ……」

亜美　「（耳元でささやくように）……後ろからだとキスできないから、正面を向くね……んしょっと……」

亜美　「（耳元でささやくように）……あんたはそのまま座ってて。あたしが上になって動くから。さっきの初エッチで、一生懸命動いてくれたから、今度はあたしの番……」

亜美　「（耳元でささやくように）……じゃあ、あたしのおまんこに入れちゃうね……あんたのフルボッキおちんちん……」

亜美　「んっ……！　あっ……！　やだ、あんたのおちんちん、さっきよりおっきいっ……！」

亜美「気のせいじゃないってば……！　体位が違うからそう感じるだけなのかなぁ……んんっ……！　とにかく、亀頭のところが、ぷくって膨らんでて……！」

亜美「なかなか入らない……！　んっ、あっ……！　なに、これ、まだ入るっ……！　おちんちんって、こんな奥まで入るのっ……！？」

亜美「これ、やばい、かも……！　ああぁっ……！　んっ……！　これで、たぶん全部入ったと思うけど……！」

亜美「さっきよりきつい？　おまんこ、締まる？　やっぱり体位のせいだよね、これ……。こんなので動いちゃったら、あたし、どうなっちゃうんだろう……？」

亜美
「あっ！　急に動かないでよっ！　ガマンできない！？　じっとしてられないっ！？　でも、待ってっ！　そんなに下からガンガン突かれたら、あたし、すぐイッちゃうっ！」

亜美
「あっ、あっ、だめっ！　だめっていってるのにっ！　もっと優しくっ！　無理！？　気持ちよすぎる！？　あああぁ……あっ、だめっ！　そ、そこ、だめっ！」

亜美
「一番凄いところに、おちんちんの先が何回も当たってるっ！　子宮の入り口に当たってるのっ！」

亜美
「あたし、もうダメェ、あっ、イッちゃうよぉ……！　あっ、ああ　あっ、あああああっ、あああああ……
……！！！！」

亜美
「イクうううううううううううう
うううううううううううううう
うううううううううううう……
……！！！！」

亜美「あぁ……先にイカされちゃったあぁ……ぁぁ……ぁ……」

亜美「優しくっていってるのにぃ……激しくするんだからぁ……もぉ……はぁ……ふぅ……本当はあたしが動いてあげるはずだったのに……」

亜美「んっ……こんな感じで……腰をくねくねってさせて……んっ、あっ……！　どーお？　気持ちいーい？」

亜美「そんなに凄いの、これ？　ふふっ。ぎゅっておまんこ締めてるからかな……んっ、あたしも……気持ちいい……」

亜美「おまんこの奥の方で……おちんちんが擦れてるのがね……とっても気持ちいいの……さっきと違って、まったりした感じの気持ちよさで……」

亜美「あたし、これ、好きかもぉ……ぁぁぁぁ……はぁぁんっ……んん……あっ、んんんっ……！」

亜美

「キスもしよぉー？　んちゅっ……れろっ……ちゅぷっ、んふっ……ちゅぱっ、はむっ……んんっ……！　んむっ、ちゅぷっ、んふっ、くちゅ……れろちゅぷっ……！」

亜美

「んー……れろくちゅぷっ……れろ、ちゅぷっ……れろんっ……んふっ、れろ、ちゅぷっ……れろれろ……！　んふっ、んふぅんっ……ちゅっ……んふふふっ、ちゅっ！」

亜美

「エッチしながらキスしてると、上も下も繋がって、なんだかひとつになって溶けちゃいそお……はあぁぁ……んちゅっ、れろっ……！　ちゅぷっ、ちゅっ……！」

亜美

「れろっ、ちゅぱっ……んふぅんっ……んんっ、んぷっ、ちゅちゅっ、ちゅぶ、ぶぶぶっ、はぁ……！　れろ、ちゅぷっ、くちゅ、じゅぶ、ちゅぷっ、れろっ……！」

亜美

「あんたの唾液、いっぱい飲んじゃったぁ……でも、もっと飲んじゃうっ……！　れろ、くちゅ、ちゅぱっ、ちゅぷ、んふっん、ぶぶぶぶっっ……！」

亜美

「……れろっ、ちゅぷっ、んふっ、れろっ、ちゅぷっ……！　はぷっ！　んんっ！　はっ、ああっ……！　んふっ、んんっ、れろっ、ちゅぷっ……れろっ……！」

亜美

「んふぅっ、れろっ、ちゅぱっ……！　はぷっ、んふっ、んふぅんっ、んはっ……！　ちゅぷっ、んはっ、くちゅ！　ちゅぶっ、れろちゅっ、ちゅ……！」

亜美

「ちゅぷっ、くちゅっ、んんっ、はぷっ！　れろっ、れろっ、ちゅぷっ……！　んぷっ、んふぅんっ、んんっ！　はふっ、んんっ、れろちゅっ……！　ちゅぱっ……！」

亜美

「キス好き……頭がボーッとしちゃうっ……んんっ……ちゅっ、はぁ……んむっ、れろ、ちゅっ、ちゅっ……ちゅぱっ……はあぁ……はあぁっ！」

亜美

「んー、また射精しそうになってきた？　ゆっくり動いているのに？　あたしがおまんこ締めすぎちゃってるのかな？　ふふっ」

亜美

「それともキスで興奮しすぎちゃった……？　んー、両方？　んふふふっ……しょーがないなぁ。いつでもイッていいよぉ」

亜美

「あたしのおまんこに、あんたの精液、いっぱい出して。でも、この体位だったら、子宮にいっぱい入っちゃうかもぉ……ああ……！」

亜美

「きっと入っちゃうよぉ……！　だから、あたしの子宮に、精液いっぱい注ぎ込んでぇ……！　んっ、あぁ……はっ、あああぁ……！」

亜美

「あっ！　おまんこの中で、おちんちん、ぷくって膨らんだっ……！　もう射精しそうなんだね……！　いいよ、早く、あたしの子宮にいっぱい射精してぇ……！」

亜美

「あああああっ……！　また出てるっ！　精液、いっぱい出てるぅっ……！　中出し、凄いいっ……！　子宮にいっぱい、精液、入ってるよ……！」

亜美

「すっごく熱くて、どろってしてるから、それがはっきりわかるのっ……！　んんっ、あああっ……！　あっ、んんっ、はぁんっ……んんっ、あああぁ……あああぁ……！」

亜美

「もっと絞り取ってあげるね……！　んんんっ……！　あんっ！　おまんこ締めたら、また精液、出たあぁ！　射精したぁ……！　あっ、んん……はあああぁ……んっ……！」

亜美「んんっ……！　どぴゅどぴゅって
いっぱい出てるねぇ……！　あああ
……！　んっ……はっ、あぁ……
あぁ……っ！　あっ、んっ、はぁ
んっ……んんっ……！」

亜美「ああぁ……あっ……んはあっ、あ
あぁ……んんっ……治まったぁ？
んふぅんっ……いっぱい射精し
ちゃったねぇ……はあああぁ……」

亜美「……このままぎゅってしてぇ……
んっ、そう……エッチの後にぎゅっ
てされるの、好きぃ……」

亜美「このままゆっくりお湯に浸かって
よー……はぁ……んっ……」

＊　＊　＊　＊

●客室（夜）

//★トラックの　お姉ちゃんの膝枕、そして耳掃除

亜美「……はぁ。いいお湯だったね～。
んー、なぁに？　膝枕して欲しい
の？　……うん。いいよ。じゃあ、
おいで」

亜美　「ん？　これ、耳かき？　もしかして、耳掃除して欲しくて膝枕を？　ふふっ。それくらいいつでもしてあげるのに」

亜美　「あ、これ、お土産屋さんで売ってた耳かきじゃない。こっそり買ってたんだ。あははっ。準備ばっちりじゃん」

亜美　「それじゃあ始めるよー？」

亜美　「どーお？　んー？　気持ちいーい？　あー、そうだよねー。久しぶりだよね、耳掃除してあげるの」

亜美　「小さい頃はよくしてあげてたね。覚えてるよ、あたし。でも、あんたさ、最初は嫌がってたよね、耳掃除するの」

亜美　「こそばゆいとかって。だから、なかなかさせてくれなくて。耳の中だって、清潔にしなきゃいけないのにね」

亜美　「あ、大きいの取れた。えっとティッシュティッシュ……」

亜美　「はーい、続きー。じっとしててねー……」

亜美　「ふふっ。気持ちよさそうな顔してる。エッチとどっちが気持ちいい？　ん？　比べられない？」

亜美　「まー、それもそっか。気持ちよさの方向性が全然違うもんねー」

亜美　「んー？　奥の方にもちょっとおっきいのがありそうだぞー？」

亜美　「んー……でも、奥の方までするの、ちょっと怖いかな……」

亜美　「いーい？　絶対動いちゃダメだからね。絶対だよ？」

亜美　「じゃあ、そろーっと……そろーっと……んっ……もうちょい……取れそうなんだけど……なかなか引っかからないなー……」

亜美　「んー……これ……ここの……これを……あっ、取れたかな？」

亜美　「んー、だめだった。空振り。もっかい……」

亜美　「もうちょい……ここの端っこに……んー？　くすぐったい？　でも、絶対動いちゃだーめっ……もうちょいだから……」

亜美　「んー……もうちょい……もうちょい……ここのところを……んー……」

亜美　「……あっ、取れたかも？」

亜美　「やった！　取れた！　ほら、こぉーんなおっきいのが奥の方にあったんだよ？　やっぱりあたし、耳掃除、上手いよね」

亜美　「こっち側はこれでオッケー。じゃあ、反対を向いて」

亜美　「ん？　こっち向きだとあたしのおっぱいが見えそう？　ふふっ。いーんじゃない？　見えちゃっても」

亜美　「（耳元でささやくように）……あたしのおっぱいは、あんたのものでしょ？」

亜美　「ふふっ。じゃあ、こっち側も耳掃除してくよー？」

亜美　「ねぇ。どうして小さい頃はあんなに耳掃除を嫌がってたの？　ん？　恥ずかしかった？　じゃあ、照れてただけ？」

亜美　「やだー！　そーなんだ！　んふふふっ。かーわいー。あたしの耳掃除が嫌だったわけじゃないんだね」

亜美　「え？　だって、結構ショックだったんだぞー？　あんたがあたしの耳掃除を嫌がるの。あたしはしてあげたいのに逃げてばかりでさー」

亜美　「でも、今はこうやって耳掃除させてくれるから、まいっか。そーゆーのもあたしとあんたの大切な想い出よね」

亜美　「……あ、こっちもおっきいの取れた」

亜美　「続きするよー？　耳の中、もっと綺麗にしなきゃねー……」

亜美　「んー……でも、さっきのが一番大きかったみたい……もうあんまり取れない……かな？」

亜美　「でも、念のためもうちょい……んー……奥の方も綺麗だし……もう取れそうにないかなー……？」

亜美　「でも、気持ちいいならこのまま耳の中をくすぐっててあげよっか？」

亜美　「ふふっ。して欲しいんだー。じゃあ、このままもうちょっとだけ耳掃除しててあげる」

亜美　「どーお？　痛くない？　気持ちいーい？　うん、よしよし。お姉ちゃんにたっぷり甘えなさい」

亜美　「ふふっ。本当に気持ちよさそうな顔してるー。うんうん、お姉ちゃんは嬉しいぞ。ふふっ」

亜美　「でも、このくらいにしよっか？　やりすぎると出血しちゃうしね。はい、お姉ちゃんの耳掃除は終了です」

＊＊＊＊

亜美　「……ふふふっ。あんたの腕枕で寝る日が来るなんて、こないだまでは夢にも思ってなかったよ」

亜美　「……あんたは夢見てた？　お姉ちゃんを腕枕したかった？」

亜美　「……そ。したかったんだー……ふふっ。お姉ちゃんは嬉しいぞ。だから、ご褒美に……ちゅっ」

亜美　「……んー？　ほっぺにちゅーは不満？　物足りない？　じゃあ、あんたの方からキスして」

亜美　「……んっ、ちゅっ……んんっ！？　ちょ、ちょっと……激しいのは……んんっ！　ちゅっ、れろっ……ちゅぷっ、ちゅっ……！」

亜美　「……んぷっ！　も、もお……！　そんなにエッチなキスしたら寝られなくなっちゃうでしょ？　だーめっ。明日もあるんだから……」

亜美　「……ガマンできる？　よしよし。ご褒美に今度はなでなでしてあげる」

亜美　「……なでなで。なでなで。ふふっ。電気は消してるけど、月明かりでぁんたが照れてるの、はっきり見えるよ」

亜美　「……こんなに顔が間近にあってさ。やっぱりドキドキしちゃうよね。でも、目を閉じると凄く安心する」

亜美「……あんたの身体のぬくもりと……吐息の音と……匂いと……全部安心する……ふわぁ～……」

亜美「……んっ。さすがに眠くなってきちゃったね……じゃあ、寝よっか？……うん。あたしも幸せだよ。ふふっ。おやすみね……」

＊　＊　＊　＊

●客室（早朝）

／／★トラック7　早朝のイタズラ。帰る前にもう一回

亜美「（寝息）すぅー……くぅー……すぅー……くぅー……」

亜美「（眠りながら感じ始める）……あ……んっ、はっ……んっ……あぁ……んっ……」

亜美「……んっ……だめっ……あっ……んふっ……はっ……」

亜美「……んっ？　なに、これ……夢……あっ、んんっ……弟くんが……あたしの……おまんこ……いじってる……？」

亜美「……寝起きの……あたしのおまんこぉ……んんっ……あっ……くちゅくちゅっていじってる……んんつ……」

亜美「……夢、なのぉ？　あっ……はっ、ん……うん……はぁ……あぁ……ぁ……」

亜美「……夢みたいに……気持ち、いい……あぁ……ごつごつした弟くんの指が……クリトリス……こりこりっていじって……すっごく……気持ちいい……」

亜美「んぷっ？　んちゅっ……れろっ、んふ……んちゅっ、くちゅ……れろっ、ちゅ……くちゅっ……ちゅぷっ、んんっ……」

亜美「……んはぁ……キスまでされちゃったぁ……すっごくエッチなキス……舌と唾液がぐちょぐちょに絡まるキスぅ……んんっ……」

亜美
「……んっ、もっかいするのぉ？　いいよぉ……んちゅ……んぶっ、んんっ……ちゅぱ、れろ、くちゅ……んふっ、んんっ……れろっ、ちゅっ……」

亜美
「……ちゅぱっ。んー……これ、夢じゃないでしょぉ？　まだ夢の世界にいたお姉ちゃんのおまんこを、弟くんが勝手にいじってたんでしょぉ？」

亜美
「……もー……エッチなんだからぁ……あんっ。クリトリス触って誤魔化さないのぉ……あぁぁぁ……あ、んんっ……はぁ……んんっ、あっ……ぁ……」

亜美
「……すっかりエッチな触り方を覚えちゃって、もおー……んっ、あっ……んふっ……はっ、あ……んんっ……はぁ……んんっ……」

亜美「……寝起きのお姉ちゃんを襲うなんて……悪い子なんだからぁ……あぁ……あぁっ、んんっ、はっ、あぁ……ふぅんんんっ……」

亜美「……やぁんっ……やめちゃ、やぁ……だめぇっ……ちゃんとおまんこ、くちゅくちゅしてぇ……今やめちゃうなんて、もっと悪い子だよぉ……」

亜美「……あっ、そう……お姉ちゃんのおまんこを……くちゅくちゅするのぉ……ああぁ……んんっ、はっ……あぁ……やぁんっ、んんっ、はっ……あぁぁ……！」

亜美「……まだ朝早くて眠たいのに……エッチするなんて……身体中がふわふわするぅ……んんっ、あぁ、んっ……んふぅんっ……はぁぁぁ……んっ、あぁ……！」

亜美「……やっ、もうイキそうおおっ……そこ、クリちゃん、いっぱい擦って……！　摘まんで……！　こりこりしてぇ……！」

亜美「……そしたら、お姉ちゃん、もうイッちゃうから……！　あ、やっ、ほんとにイク、イク――――……」

亜美「（押し殺したような声で）……イクうううっうううううぅぅぅんんんっ……！！！」

亜美「……あぁぁ……弟くんの指で……おまんこくちゅくちゅされて……イッちゃったあぁぁ……」

亜美「……ねぇ、もう入れてぇ……弟くんのおちんちんを、お姉ちゃんのおまんこに入れて欲しいのぉ……」

亜美「……あ、でも、ここじゃなくて……ちょっとこっちに来て……んしょ……」

亜美　「ほら。あんたも一緒に来て。」

亜美　「こーこ。洗面所でしょ？　どうしてって、鏡があるじゃない？　だーかーらー……」

亜美　「（耳元でささやくように）……あんたのフル勃起おちんちんを、後ろから入れるの。それでね、あたしのおまんこをガンガン突くの」

亜美　「（耳元でささやくように）……そしたら、感じてるあたしを鏡で見られるよ？　どーお？　興奮しない？　する？　ふふふっ。するでしょ？」

亜美　「（耳元でささやくように）……あたしも立ちバック……やってみたかったの。じゃーあー……あんたのおちんちん、入れてくれる？」

亜美　「……あっ、おちんちんの先っちょが……当たってるっ……んんっ……くぅんっ……」

里美	「あああ……ー　ちょっと入ったっぱいまっお、っは、っん　ー……ああああ……ー　はっ、あああ」
里美	「やあっ……ー　どんどん入って来るっ　ー　おまんこに、入ってくるっ……っっっ」
里美	「ああ、ふっとぉっ……ー　んん　ー……っいやちゃ刺に口入り宮子　ー……っんんっ……ー　やだあ、まだ入るっっ……ー　そおおっ」
里美	「あんっー　全部入ったあ……ー？　すっごいっ　ー……っ後ろから入れられると、足が浮いちゃいそうになるっっ……ー」
里美	「じゃあ、動いてぇっ……ー　あんたのおまんこに、ぱっぱっ擦ってぇぇ……ー」

亜美

「やっ……！　あっ……！　あぁ……！　んんっ……！　はあぁ……！　んっ……！　あぁ……！　んんっ……！　んふっ……！　んっ、あぁ……！」

亜美

「お腹の一番奥までっ、子宮の壁まで、おちんちんが刺さってるっ……！　はっきりわかるよぉっ、あぁっ……！　んっ、あっ、あふっ……！」

亜美

「すっごいっ、あんたのおちんちん、すっごいのぉっ……！　はっ……！　んっ、はぁんっ……！　ああぁ……！　あふっ、んんっ……！　はぁんっ……！」

亜美

「ふふふっ……！　鏡があるから、感じてるあたし、見えるでしょおっ……！？　あたしからも、気持ちよさそうにしてるあんたの顔、はっきり見えるよぉ……！」

亜美

「あんっ……！　どーお？　あたし、いやらしい顔してる？　エッチな顔してるっ！？　ふふっ。あんたのおちんちんが気持ちいいからだよぉっ、あぁぁぁ……！」

亜美

「やんっ、ああんっ……！　興奮したぁ！？　あぁん……！　じゃあ、もっと、もっといっぱい突いてぇっ！　ぱんぱんっておまんこ突いてぇ……！」

亜美

「あぁ！　早くなったぁっ！　んっ！　はぁんっ！　あぁぁ！　これ、すごいのっ、気持ちいいのっ！　あっ、んっ、そこ、いいよぉ！　あぁ！　もっと、もっとぉ！」

亜美

「これ、凄いっ！　おまんこの中、おちんちんでかき混ぜられてるみたいっ！　ああんっ、んんっ！　んっ、んんふぅん！　あああぁ！」

亜美

「お姉ちゃんのお尻、ぎゅって、つかんで、必死で腰を振ってるあんたが、とってもかわいい！　お姉ちゃん、興奮しちゃうううっ！　あんっ、はあぁぁ！　んんっ、はっ！」

亜美

「んんっ、はぁんっ、あああぁぁんっ！　んんっ、あぁあっ、んっ！　はぁんっ、んふぅんっ！　はあぁっ、ああああぁ！　あんっ、ああぁっ！」

亜美

「あんっ！　お尻の穴なんて、触っちゃだめぇっ……！　お尻を触ると、おまんこが締まるっ！？　だからって、指まで入れちゃ、だめぇっ！」

亜美

「あっ、やだっ！　指、入れながら、おまんこ突くなんて、そんな器用なことしちゃだめぇっ！　あんっ、あぁっ！」

亜美
「これ、おまんこが締まるの、あたしのせいじゃないもんっ！　アナルに指、入れられたら、勝手に締まっちゃうんだもんっ！　んんっ！」

亜美
「ああっ！　指、出し入れしちゃだめぇっ！　とにかく、だめなのおっ！　あああっ！　もう、こんなにヘンタイになちゃって、誰に似たのおおっ！？」

亜美
「えっ！？　お姉ちゃん！？　あたしがかわいすぎるからヘンタイになっちゃったのっ！？　そんなの、知らない、もおおっ！　ああぁっ！」

亜美
「あっ、ああぁっ、だめっ、あ
あぁっ、あああっ！　あふっ、ん
くっ！　あんっ！　ひゃっ、あっ！
はぁんっ！　ああっ、あくっ、ん
んっ、んふぅんっ！」

亜美
「やぁんっ！　また、激しくっ、なったぁ……！　あっ、ああっ、やっ、だめっ、だめだってばぁっ、ああ
あっ、はあぁんっ！」

亜美
「イキそうだから仕方ないっていうの！？　だから、おまんこの中で、おちんちんがまたおっきくなったのっ！？」

亜美
「おまんこが火傷しそうなくらい熱くて、お腹がぱんぱんになるくらいおっきくて、あんたのおちんちん、凄すぎるのっ！」

亜美
「あっ、やぁっ、だめっ、こんなの、凄いよおっ！　おまんこの一番奥に、おちんちんが何回も当たって、凄いのおっ！　あああぁっ、んっ、ああぁっ！」

亜美
「あぁんっ！　お尻の穴に入れた指でくりくりしちゃ、だめぇっ……！　あっ、やっ、もう、あたし、だめなのっ、まだイッちゃうのおおっ！」

亜美
「あんたもイッて！　あたしのおまんこに、精液、いっぱい、中出ししてぇ……！　あたしもイクからっ！」

亜美
「アナルに指、入れられたまま、おまんこガンガン突かれてイッちゃうからあぁっ！　ダメえぇっ！　ああぁ、はっ、あああぁっ、んんっ、あぁっ！」

亜美
「あっ、やっ、んんっ、ほんとにイッちゃうううっ！　弟くんのおちんちんで、お姉ちゃんのおまんこがイッちゃうううっ……！」

亜美
「イクうううううううううううううううううんんっ！　あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ！！！」

亜美
「（絶頂に震えながら）んっ、はっ、あっ……！　んぅ、はぁんっ……！　あっ、ああっ、んぅ、はっ、あぁ……！」

亜美
「あんたの、精液、いっぱい、おまんこに出てるっ！　すっごく、あっつぅいっ！　ほんとに火傷しちゃいそおおっ！　あああっ！」

里美	「あんっ！　寝起きだからなのっ？　一番奥のにんぽが、何回も何回も、射精してるっ！」
里美	「子宮にいっぱい、あんたの精液、入ってるっ！　んんっ、また出たああっ！　ああああああ……！」
里美	「仕返しに、おまんこ締めてやるんだからああっ！　ほらあっ！　あんっ！　まだぴゅっぴゅ射精してるうっ……！」
里美	「あくっ……！　はあ——！　はあ——！　はあ——！　はあああああああ——————……射精……止まったみたいだね……ふふふっ……」
里美	「すっごい……いっぱい出ちゃったあ……イッちゃった……すっごい……あたしもね……でしょ？　ふふふっ……」

亜美「寝起きのエッチも……気持ちいいねぇ……んっ……ちょっとハマちゃいそう……ふふっ……んっ……あぁ……」

亜美「……あ、まだ抜かないでぇ……おちんちんでフタしててぇ……せっかくの熱い精液が垂れちゃうぅ……」

亜美「……もうちょっとだけ……あたしの中で感じさせて……あんたの精液……ふふっ……」

亜美「……んー？　キス？　この体勢でもキスできるよ……おちんちんは入れたまま、あたしがこうやって身体を起こして……」

亜美「……ちゅっ……んっ……んぷっ……れろっ、れろっ……ちゅっ、れろっ……んぷっ……ちゅっ……れろっ、ちゅっ、れろっ……！」

亜美「……んちゅっ、れろっ、れろっ、れろっ……ちゅっ、んくっ、んちゅっ……れろっ……れろ、ちゅる……ちゅっ、ふんむ……れろっ、ちゅぷっ……！」

亜美「……ちゅぱっ。　はぁ……ね？　キスできたでしょ？　ふふっ……おまんこの中で……おちんちんがぴくぴくって動いたね……」

亜美「……じゃあ、このまま露天風呂に入っちゃおっか？　汗もけっこうかいちゃったしね……」

亜美「……あ、抜くのね……おちんちん……」

亜美「んっ……んんんっ……！」

亜美「……おちんちん……抜けたぁ……はぁ……急に寂しくなっちゃった……ふふっ……でも、あんたの精液は中にたっぷり入ってるよぉ……」

亜美「……あ、ほんとに垂れて来ちゃうっ……！　早くお風呂にいかなきゃ……！　急ご！？」

●旅館の前（昼・曇り）

亜美「素敵な旅館でした。また来ますね」

女将さん「是非、またお越し下さいませ」

亜美「ありがとうございました。ほら、あんたもちゃんとお礼を言う」

亜美「そうそう。（耳元でささやくように）……あんなにいっぱいエッチさせてもらったしね」

亜美「それじゃあ、失礼しまーす」

亜美「……本当にいい旅館だったね。ご飯も美味しかったし、お酒も美味しかったし！　部屋についてる露天風呂も最高だったし」

亜美「また旅行しようね。もちろんエッチも……ふふふっ……」

亜美　「んー？　もう興奮してきちゃったの？　はーやーいー。家までガマンして」

亜美　「（耳元でささやくように）……帰ったら、またしてもいいから」

亜美　「あー！　真っ赤になった～！　やっぱり弟くんはかわいいねぇ。お家についたら、い～っぱいかわいがってあげる。ふふっ」

／／おわり